

蜘蛛の糸

razoredge

克典

蜘蛛の糸

呑み屋。

「どうしたの、浮かない貌して？」

カウンター越しに、華が芹沢に訊いた。その問いに弾かれたように芹沢は我に返った。

「あした、旧友に逢うんだけど……」

「あら、いいじゃん？」

「まあな。ちよつと、気まづくってさ」

「仲良くないの？」

須臾、芹沢は考えた。

「悪くはない」

「なら、いいじゃん？」

「今年、川谷捕まったじゃん？」

川谷は、現役を引退して一〇年立とうとしている元NPBの選手。高卒一年目から目覚ましい活躍をして、数多のタイトルを獲得するだろうと囑望され、実際に何度もチャンス

はあつたものの一度も打者三冠を獲得できないまま二十余年の現役生活を終えた。通算成績は王や野村のそれに次ぐものとなった。

「今年だったっけ？ 去年の年末って云われたらそうおもっちゃいそうだけど？」

一月、川谷は覚醒剤取締法違反の容疑により在宅していると踏み込まれて現行犯逮捕された。先日、執行猶予付きの有罪判決が確定した。

「パクられる二年前に、うちの雑誌で疑惑を取りあげただろう？」

その記事は蜂の巣をつついたような騒ぎに発展した。元花形選手とその凋落は、明快で、掲載号は忽ち捌けた。尤もらしいニュースだったので、タレントの真似事をしていた川谷は事なかれ主義が席卷するテレビ業界から干された。

「訴えられたんだったっけ？」

川谷は注射器を携行していることを認め

た。しかし、それはインシュリンを自己投与するために用いていると主張し、返す刀でかかる雑誌を発行した出版社に民事裁判を起すと言った。

芹沢はかぶりを振った。

「結局流れた」

「凶星だったからでしょう？」

「だろうな」

「川谷がパクられたことと明日の件はどう繋がるの？」

大半の国民の間で固有名詞が通用する稀有な人物。

「二年前のスクープさ、明日逢う相手からちよるまかしたんだよな。」

あの騒動の前に、相手から誘いがあってさ。連絡なんて貰ったのは大学時代含めても初めてだった。

サシ呑みしたんだ。相手は、警察関係なのね。たまたま捜査資料みたいなのを手許に置いてて、相手が席を立ったときに張り込み中

に撮ったものらしい写真が覗いちやったんだよね」

「それで取材をして、記事を書いた？」

芹沢は頷いた。

「騒動になったせいで逮捕が二年遅れたんだから、並大抵の店で接待したって勘弁して貰えないだろうね？」

悪戯っぽい華の笑みに芹沢も力なく笑ってみせるしかなかった。

翌日の夜、芹沢は二ノ宮と卓を挟んで向かいあっていた。

乾杯を済ませ、料理に舌鼓を打ちながら、世間話や昔話を織り交ぜて、心地好い時間を過ごした。芹沢は今年を代表するニュースでありながら川谷のことには触れないようにしていたし、二ノ宮も言及しなかった。二年前の酒席とスクープ記事の因果関係についても然りだった。

四杯目の船中八策に口をつけたときだった。「川谷、やめられなかったな」

二ノ宮の発言に、芹沢は咽せた。

「お、おい、だいじょうぶか？」

二ノ宮のハンカチを手で辞した。

芹沢は意を決した。

「二年前のこと、すまなかった」

卓に手をつき、深々と頭を下げた。二ノ宮は恐縮し「そんなことやめてくれ」と一言添えて制した。

恐る恐る面をあげる芹沢。

「若い頃、甥っ子をドームに連れていった。その試合で川谷がホームランを打った。試合はどうなったのか憶えていないけれど、甥っ子は興奮していた。おれも興奮した。球場に駆けつけた数万人が興奮してそれが渦巻いた。」

川谷は、生涯で五〇〇本くらい打ったのかな？ その一本一本毎に数万人を感動させたんだ。

甥っ子、野球やってたんだけど、大学生のときに交通事故で死んじゃったんだ。なんか、思い出らしい思い出っていったら川

谷のホームランを一緒に観たことくらいだ。

お前のところの記事が出て騒ぎになったときをやめてくれりやな……」

芹沢が虚を衝かれたような表情をした。

「お前まさか……」

二ノ宮は、否定も肯定も拒むように、杯を煽った。(2016-02-14)

